

第 79 回 歴史リレー講座「天平の疫病大流行と聖徳太子信仰」 吉川 真司氏 (R3.4.25)

日本最初のパンデミック、それは奈良時代の日本列島に猛威を振るった天然痘でした。本日は当時の状況と、その流行が聖徳太子信仰の高まりに大きな影響を与えたことについてお話しします。

天然痘が初めて発生したのが天平 7 年 (735)、聖武天皇の祖母も感染によりこの年に亡くなっています。翌年にいったん落ち着いたものの、9 年には未曾有の大流行。政府高官が次々と斃れました。天平 7 年の『続日本紀』は「この歳、年頗る稔らず。夏より冬に至るまで、天下、豌豆瘡 (天然痘) を患う。天死する者多し」と記し、9 年の同書は「この年の春、疫瘡大いに発る。初め筑紫より来り、夏を経て秋に渉る。公卿以下天下の百姓、相継ぎて没死すること、勝げて計うべからず。近代以来、いまだこれ有らざるなり」と過酷な状況を伝えています。

第一波は大陸からの使者を介した感染が原因でした。当時の総人口は推定 450 万人。第二波における総人口に対する死亡率は 25~35%、第一波と合わせて 150~200 万人もの犠牲者を出したことになります。巨大な第二波のさなか、太政官は本州と四国の国司に対して感染対策を布告。感染した場合の症状を説明し、日常生活の注意点や食事療法を事細かに指導しています。また、米が足りない場合は正税 (地方財源) から捻出するよう指示も出しています。当時の国司は出挙稻 (貸出米) の利息で財政を運用していました。豊後の天平 9 年正税帳 (会計報告書) によると、免税稻 (借りた人が死亡) の割合が高いことが分かります。免税率は死亡率に相当するので、『続日本紀』にあるように、第一波はやはり九州で発生したのでしょう。

対症療法だけでは思うような効果が見られないため、政府は賜物、免税、大赦、奉幣、仏事などを最大限活用した政策で救済に乗り出します。なかでも、釈迦三尊像を国ごとに造らせたことは、のちの国分寺政策の基礎となりました。さらに、大極殿にて金光明最勝王經の講義や、天平元年に無念の死を遂げた長屋王御霊を鎮める法要まで執り行いました。その甲斐あってかどうか天平 9 年の冬になって流行は終息。これをきっかけに金光明最勝王經に対する機運は一気に高まりました。そうはいつても、天皇をはじめ政府要人、庶民はみな第三波、第四波の恐怖と闘いながら日々を送っていたに違いありません。

ここからは疫病と聖徳太子信仰の関係について。法隆寺の西院伽藍と、夢殿を中心とする東院伽藍 (上宮王院) の中間にあるのが、607 年創建の若草伽藍 (最初の法隆寺 = 斑鳩寺)。当時は斑鳩寺のすぐ東に太子の屋敷 (斑鳩宮) が存在しましたが、643 年、蘇我入鹿に攻め入られた山背大兄王ら太子一族は全滅。そのとき焼失した斑鳩宮跡が現在の東院伽藍です。宮跡は長年放置されていましたが、疫病禍のころに夢殿が創建され、太子信仰は高まりを見せます。もっとも、それ以前から太子信仰は存在し、遅くとも 8 世紀初めには聖人化されていました。

特に、聖武天皇の妃光明子の母、橘三千代は太子信仰に篤い人でした。そのため、光明皇后は疫病流行の前年に母の一周忌として興福寺西金堂を造営、法隆寺には資財を施入して母の想いを受け継ぎました。これにとどまらず、天平 7 年冬には法隆寺に法華經講説の財源を施入して講義を継続。疫病終息後に完成させた上宮王院は太子ゆかりの仏像や經典などを集めた「供養堂」です。疫病流行以前から太子信仰に熱心だった皇后が太子の力を借りて疫病を鎮めようと尽力したことがよく分かります。

行基の功績を収めた『行基年譜』によると、天平 9 年、菩提 (現在の斑鳩町岡本) に頭陀院と頭陀尼院という道場を建てたとあります。頭陀とは仏教修行のひとつで乞食のこと。ここで思い出されるのが、聖徳太子と飢人の説話です。太子は遊観中に出逢った病の飢人に施しを与えますが翌日に飢人は亡くなっており、太子は墓を造ってやります。墓の場所は『日本書紀』では片岡村ですが、『日本霊異記』では岡本村となっています。その岡本村の北東にあるのが菩提山。行基がこの地を選んだのは太子信仰に関わる場所だったからに他ならないと私は推察します。さらに、光明皇后も斑鳩全域の寺に対して援助を惜しみませんでした。その後、行基は東大寺大仏造営に関わり、やがて主導していく立場になります。両者の最初の接点がこのころでした。いつの時代も疫病禍によって政治、経済、社会は否応なく様変わりします。奈良時代は宗教にもたらされる変化も甚大でした。